

主催挨拶

「東京お台場トリエンナーレ 2025」は、水辺の自然に恵まれ、世界に繋がる海の玄関口であるベイエリアを舞台に、2025年10月から開催されます。

2025年は、世界陸上やデフリンピックが開催される年です。国内外から多くの方が訪れる特別な時期に、かつて幕末に日本が新しい文化と出会った歴史的なこの場所で、アートを通じて東京にしかない価値や魅力を先鋭的に発信する国際芸術祭を開催することは、東京の芸術文化をさらなる高みへと導くことでしょう。

アートは、街に息吹を与え、その魅力を向上させ、私たち一人ひとりに感動と喜びを与えます。最先端のアートから私たちに投げかけられる未来への問いは、より良い社会づくりや持続可能なまちづくりの原動力となります。

2025年、どのようなアートに出会えるのか。東京という都市がどんな変貌を遂げていくのか。とても楽しみです。



東京都都知事
小池百合子

このたび、東京都と共にお台場トリエンナーレ実行委員会は「東京お台場トリエンナーレ 2025」を開催する運びとなりました。今や臨海副都心の代名詞となった「お台場」は、江戸時代からの歴史もあるエリアであると同時に、新たに開発された人工的な近未来都市としてのイメージもあります。嘉永6(1853)年のペリー来航を機に、外国の脅威から江戸を守るために、大砲を置く「台」となる「場所」として徳川幕府により築かれたのが「お台場」です。レインボーブリッジのたもとに浮かぶ島と、史跡となっている「台場公園」が砲台として築かれ、もともとの「お台場」がその名残をとどめて現在に至っています。江戸と現代の東京が不思議に調和し、同時に存在する、ウォーターフロントの美しいロケーションが魅力の「お台場」。エンタテインメント催事や東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されるなど、街の魅力を向上させてきました。そこで、台場エリアをこれからも継続的に活性化させるイベントとして、現代アートを中心とした国際的な芸術祭を開催し、これまで培ってきたエンタテインメントとアートの力で東京の魅力を世界に向けアピールしたいと考えています。分断と混迷が続く不安な世界情勢の中で、芸術の力はますます重要になってきています。会場を訪れる方々が現代アート作品と触れ合うことで、感動、喜び、楽しみや癒しを、あるいは気づきや思索のきっかけになる場を提供する。そして、新たな価値観と出会う体験を東京・お台場で創出できれば、それにまさる喜びはありません。日本が世界に向けて国を開ききっかけとなった歴史的な場所であるここ「お台場」から、新たな地平を切り開く、未来を見据えた多様な視点で芸術文化の力を世界に向けて開示することで、長く人々の記憶に残るイベントになることを切望しております。



お台場トリエンナーレ実行委員会
実行委員長 遠藤龍之介

お台場について

臨海副都心の人気スポット・お台場の由来は、幕末に造られた江戸湾の防衛拠点です。地名となっている「台場」とは砲台、つまり大砲を置く「台」となる「場所」のことを意味しています。1853年(嘉永6年)のペリー来航に直面した江戸幕府は、外国船の襲来を脅威に感じ、江戸を守るために品川沖と沿岸に6つの台場を築造しました。

当時、幕府直轄の地や由来があるものには、「御」を付けて呼ぶ習慣があったことから、「台場」に「御」がつき、現在に至る過程で「お台場」と呼ばれるようになりました。

近年、臨海副都心として整備され、新しい街へと生まれ変わった「お台場」。江戸時代からの歴史あるエリアであり、また東京のウォーターフロント開発の象徴ともいえる発展をしてきた「お台場」は、国内外から多くの注目を集めています。



現在のお台場の風景

開催概要

名称 | 東京お台場トリエンナーレ 2025 | 読み方：トウキョウ オダイバ トリエンナーレ ニセンニジュウゴ
Tokyo Odaiba Triennale 2025

タイトル | 泰平の眠りを覚ます上喜撰^{じょうきせん} —野生とカオスと新世界—

会期 | 2025年10月18日(土) - 2025年12月25日(木)

会場 | 台場公園、フジテレビ本社屋・湾岸スタジオ、日本科学未来館ほか
*上記ほか、随時公開予定

主催 | 東京都、お台場トリエンナーレ実行委員会

後援 | 港区、江東区、品川区

協力 | 日本科学未来館ほか

チケット | 2025年5月以降 詳細発表

公式WEB | <https://www.tot2025.art/>

S N S | X (旧 Twitter) @tot2025_art
Instagram @tokyo_odaiba_triennale

公式ハッシュタグ |
#東京お台場トリエンナーレ 2025
#TokyoOdaibaTriennale2025

広報 問い合わせ |
広報事務局 鎌倉・進藤 [N&A 内] / 篠原 [liil inc.内]
〒153-0051 東京都目黒区上目黒 1-11-6 TEL 03-6261-5784 FAX 03-6369-3596
MAIL press@tot2025.art

広報画像は下記より DL をお願いします
<ご紹介に際しては掲載に関する注意事項をご確認ください>
<https://tinyurl.com/mry2s3sb>

アーティスティック・ディレクター

建畠 哲 | TATEHATA Akira

(美術評論家、詩人／埼玉県立近代美術館長、草間彌生美術館長、京都芸術センター館長、京都市立芸術大学及び多摩美術大学名誉教授)



国立国際美術館主任研究官、多摩美術大学教授、国立国際美術館長、京都市立芸術大学学長、多摩美術大学学長、コロンビア大学訪問研究員などを歴任。美術館と大学で現代美術の展覧会企画や教育研究に携わるとともに、ヴェネチツィア・ビエンナーレ日本館コミッショナー（1990、1993）、横浜トリエンナーレ（2001）、あいちトリエンナーレ（2010）、東アジア文化都市京都「アジア回廊」展（2017）など国際美術展の芸術監督を務めてきた。

受賞歴はオーストラリア国家栄誉賞、文化庁創立50周年記念表彰、京都市文化功労者。詩人としては、歴程新鋭賞、高見順賞、萩原朔太郎賞を受賞している。

三木 あき子 | MIKI Akiko

(キュレーター／ベネッセアートサイト直島インターナショナル・アーティスティック・ディレクター、直島新美術館長[2025春開館])



パレ・ド・トーキョー（パリ）の創設メンバーとして2000年から2014年までチーフ&シニア・キュレーターを務めるとともに、台北ビエンナーレ（1998）、ヨコハマトリエンナーレ 2011 アーティスティック・ディレクター、同 2017 コ・ディレクター、バンコク・アート・ビエンナーレ（2024）など国際現代美術展の芸術監督やキュレーターを歴任。またバービカン・アート・ギャラリー（ロンドン）、台北市立美術館、韓国国立現代美術館、森美術館、横浜美術館、京都市京セラ美術館、弘前れんが倉庫美術館にて、日本を代表するアーティストの杉本博司や村上隆の展覧会を含む数々の展覧会のゲスト・キュレーターも担う。『Insular Insight』（Lars Müller、2011、ドイツ建築博物館建築本賞）など、共著・共編も多い。弘前大学非常勤講師も務める。

山 峰 潤 也 | YAMAMINE Junya

(キュレーター、プロデューサー／株式会社 NYAW 代表取締役、東京藝術大学客員教授)



東京都写真美術館、金沢 21 世紀美術館、水戸芸術館現代美術センターにて、キュレーターとして勤務したのち、ANB Tokyo の設立とディレクションを手掛ける。その後、文化／アート関連事業の企画やコンサルティングを行う株式会社 NYAW を設立。展覧会のキュレーション、アートプロジェクトのプロデュース、雑誌やテレビなどのアート番組や特集の監修、執筆、講演、審査委員、国際機関による海外派遣など多数。その他、文化を含む社会共通資本に関わるインパクト評価の研究や地域の魅力を再発見していく旅を 2024 年より自主活動としてスタート。

国立アートリサーチセンター外部アドバイザー。

テーマ

泰平の眠りを覚ます上喜撰 ―野生とカオスと新世界―

本展が開催されるお台場地区は、東京湾に面した埋め立て地に造成された街です。そのメインの会場の一つである台場公園も、元はといえば幕末に砲台として築かれた人工の島でしたが、海に向けて並んでいた大砲はすべて撤去されており、今は砲台や陣屋の跡などが点々と灌木や草地の中に散在しているだけです。しかし遺跡のような野趣に満ちたその光景は、歴史の陰影なき市街に隣接していることで、かえって都市における芸術祭の新たな可能性を呼び覚ますシンボルたりえているともいえるでしょう。

さて「泰平の眠りを覚ます上喜撰 ―野生とカオスと新世界―」という第一回展のテーマは、幕末にペリー提督が率いる黒船が浦賀に来航し、開国を迫った時に詠まれた狂歌（註）の言葉を借りたものです。この歌は「蒸気船」（黒船）を「上喜撰」（眠気を覚ます高級茶）と書き換えてみせるという、社会の慌て振りを揶揄した卓抜なジョークで知られてきました。まさにお台場はその黒船に対抗すべく大急ぎで築かれた砲台の島だったのですが、実際には一発の砲弾も撃つことなく鎖国政策を解くことになりました。戦いの砦となるはずであったお台場は、期せずして平和裏の開国の記念碑として遺されることになったということもできるでしょう。

もっともこの国際美術展はそうした歴史自体をテーマに据えているわけではありません。都市は人を自由にするといわれていますが、野趣のある遺跡と計画的に整備された街並みが共存するお台場地区には、新たな世界を切り開く潜在的なエネルギーが、あえていうならばカオスをも受け入れる野性的なヴァイタリティが潜んでいるのではないのでしょうか。私たちは先端的なアートの力によって、そうした非日常的な魅力に満ちた景観をこの街にもたらすことを目指しているのです。

周知のようにいま世界には、民族的、宗教的、文化的な他者に対する不寛容な思想が渦巻いています。1989年の冷戦構造の崩壊によって大きな物語が終わり、小さな物語の戯れの時代が到来したといわれました。それはイデオロギーがもたらす対立のない平和の到来を告げるはずでしたが、しかし現実には起きたことはパンドラの箱の蓋が開いたかのように、世界中に地域紛争が勃発し、テロが蔓延するというおぞましい事態であって、それはますます拡大しつつあります。

このような排他的な思想に対して、アートは抑止力になりうるのでしょうか。はたして大規模な国際展は相互理解と文化的な他者との共存に寄与するのでしょうか。また環境問題や貧富の格差、性差別なども深刻さを増していますが、こうしたことの解決にアートは力があるのでしょうか。

決して楽観するわけにはいきませんが、アートとは私たちにとって批評的なメッセージであると同時に喜びをもたらすものであり癒しでもあります。それに触れることは、困難で複雑な課題を共にして生きるレジリエンス（回復力）を身に付けることにもなるでしょう。いかにささやかではあれ、「東京お台場トリエンナーレ 2025」が、アートの力によって世界を救済する融和のための砦であることを願わずにはられません。

註 瓦版などで流布した読み人知らずの狂歌。全文は『泰平の眠りを覚ます上喜撰たった四盃で夜も寝られず』

開催エリア

-全体 MAP-

2024年11月26日発表時点

ほか、随時公開予定



開催エリア

-会場-

2024年11月26日発表時点

ほか、随時公開予定



会場① 台場公園
東京都港区台場1丁目10-1



会場② フジテレビ本社屋
東京都港区台場2丁目4-8



会場③ フジテレビ湾岸スタジオ
東京都江東区青海2丁目3-23



会場④ 日本科学未来館
東京都江東区青海2丁目3-6

第一次発表 出展作家

2024年11月26日発表時点

| 草間彌生 | KUSAMA Yayoi

すべて参考図版



1929年長野県松本市生まれ。前衛芸術家、小説家。幼少期から幻視・幻聴を体験し、網目模様や水玉をモチーフにした絵画を制作し始める。

1957年に渡米、ネット・ペインティング、ソフト・スカルプチュア、鏡や電飾を使ったインスタレーションやパフォーマンスなど多様な展開を見せ、前衛芸術家としての地位を確立。単一モチーフの強迫的な反復と増殖による自己消滅という芸術哲学を見出す。

2009年にスタートした最大の絵画シリーズ「わが永遠の魂」は12年間で800点以上にのぼり、2021年には新たに絵画シリーズ「毎日愛について祈っている」の制作を開始するなど、現在でも精力的に創作活動を行っている。2016年には文化勲章を受章。テート・モダン、ポンピドゥー・センター、M+をはじめとした世界各地の美術館で大規模な展覧会を開催。



草間彌生 《ヤヨイちゃん》
2012/2023年 ©YAYOI KUSAMA,
Courtesy of Ota Fine Arts



草間彌生 《ナルシスの庭》 上海当代美術館でのインスタレーション・ビュー 1966/2013年 ©YAYOI KUSAMA, Courtesy of Ota Fine Arts

| 笹岡由梨子 | SASAOKA Yuriko



Photo : S.C.Felix Wong

大阪府出身、現在、関西 / 香港を拠点に活動。映像の中にある絵画との接点を探るべく、絵画における手の痕跡や筆致と近似した、高性能なCG映像にはない異物感や違和感を引き出し、独自のストーリーを紡ぐ。そして、緻密な構成や物語とともに、どこか懐かしい、けれど誰も見たことのない独特の世界観をリアルに感じさせる。また、2017年に参加した北マケドニア共和国でのアーティスト・イン・レジデンスで人の温かさ、心の豊かさにカルチャーショックを覚え、以降はアジアに最も近いヨーロッパ世界のリアルな人々、暮らし、歴史に関心を深め、中央・東欧諸国のリサーチや発表を重ねている。



笹岡由梨子 《LOVERS》 2024年 Photo : 西野正将



笹岡由梨子 《PLANARIA》 2020-21年 Photo : Taichi Saito

| アブラハム・ポワンシュヴァル | Abraham POINCHEVAL



Photo : Jean-Christophe Letto

1972年フランス、アランソン生まれ、マルセイユ在住。ポワンシュバルは飽くなき探検家である。シェルターとして機能するカプセルでアルプスを横断したり、1週間岩の中に閉じこもったりと、彼の探検は自身の身体との関わりによって遂行される。このとき作り出される居住可能な彫刻は、時間の経過や不動の状況などについて考察し実験する実験室であり、アーティストを受け入れる容器でもある。そしてそれは風景を異質化鑑賞者が目撃する物語を実在化するオブジェとして機能する。パリ・オリンピック（2024）に合わせてサン=ドニ運河に巨大なボトルを浮かべ、そこで10日間生活をした《Bouteille（ボトル）》をはじめ、ルイ・ヴィトン財団（2024）、バンコク・アート・ビエンナーレ（2024）、リヨン・ビエンナーレ（2019）、パレ・ド・トーキョー（2017）などでも作品を発表している。

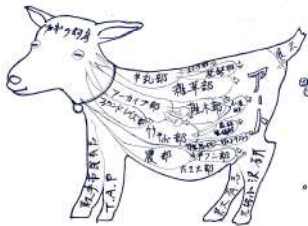


アブラハム・ポワンシュヴァル 《Bouteille, Saint-Denis (FR)》 2024年 Courtesy Semiose. Photo: Hafid Lhachmi. ADAGP Paris 2024.



アブラハム・ポワンシュヴァル 《Walk on Clouds》 2019年 Courtesy Semiose, Parisp

| ヤギの目 | Goat's Eyes (Yaginome)



2020年発足。東京藝術大学先端芸術表現科の小沢剛研究室を中心とした学生教員・地域住民有志、取手アートプロジェクトがヤギの飼育をプラットフォームとしてつながり、壁も屋根もないアーツセンターとして活動する。多様なメンバーがヤギと共に行う日々の営みを通じて、現代社会における持続可能な表現、次世代のコミュニティのあり方も模索している。過去の展覧会に2021年第一回ヤギの目ビエンナーレ「ヤギの目はアートの素をひねり出す」、2023年第二回「もしも私がヤギならば」（いずれも取手市・たいけん美じゅつ場）、「ラーニング／シェアリングー共有から未来は開くか？」（鳥取市・鳥取県立博物館）、書籍『ヤギの目記録採取帳 2020から2023』発行。近年は群馬県前橋市や鳥取県智頭町などにも地域の団体によりヤギの目が立ち上がり、土着化しゆく活動との連携が広がる。



ヤギの目



ヤギの目

| ルー・ヤン | LU Yang



東京および上海を拠点に活動。仏教哲学の影響を受け、分野を横断しながらアイデンティティやライフサイクル、技術、スピリチュアリティなどを主題とした作品を制作する。代表作として知られる「DOKUSHODOKUSHI」シリーズは、自身のデジタルペルソナを用いて現代社会の諸問題を表現し、仏教的な知性の普及を目指している。また、ルー・ヤンは作品制作においてCG技術やゲームエンジンを多く使い、科学者や心理学者、デザイナー、音楽プロデューサーなどの専門家と協働してきた。

近年の主な個展に、ルイ・ヴィトン財団 (2024)、MUDEK (2023)、バーゼル美術館 (2023)、ARoS (2021)、エルラーゲン現代美術館 (2022)、MOCA クリーブランド (2017) などがある。また、2015年と2022年にヴェネツィア・ビエンナーレに参加する他、主要なビエンナーレ/トリエンナーレに参加。BMWアートジャーニー (2019)、ドイツ銀行アーティスト・オブ・ザ・イヤーを受賞 (2022)。



ルー・ヤン 《DOKU the FLOW》 2024年



ルー・ヤン 《DOKU the FLOW》 2024年

| ブラスト・セオリー | Blast Theory



マット・アダムスとニック・タンダバニッチによって1991年設立、現在、イギリス・ブライトンを拠点に活動。大衆文化を読み解き、新技術を用いたパフォーマンス、ゲーム、映画、アプリ、インスタレーションなどを制作。社会的、政治的問題を探索することを目的にインタラクティブアートに取り組み、非日常的で、時に不安を抱かせる体験をつくりだすことを通して、新たな視点や可能性を切り拓こうとしている。

これまで、ICC (2005)、ヘッペル・アム・ウーファー (2006)、バービカン・アート・センター (2007)、ヴェネツィア・ビエンナーレ (2009)、テート・ブリテン (2010)、トライベッカ映画祭 (2015) などで作品を発表するほか、Channel 4 やサンダンス国際映画祭、ロイヤル・オペラ・ハウスの委嘱作品を制作。また、英国アカデミー映画賞にて4度のノミネート、アルス・エレクトロニカでゴールデン・ニカ受賞、ナムジュン・パイクアートセンター賞など国際的に活動している。

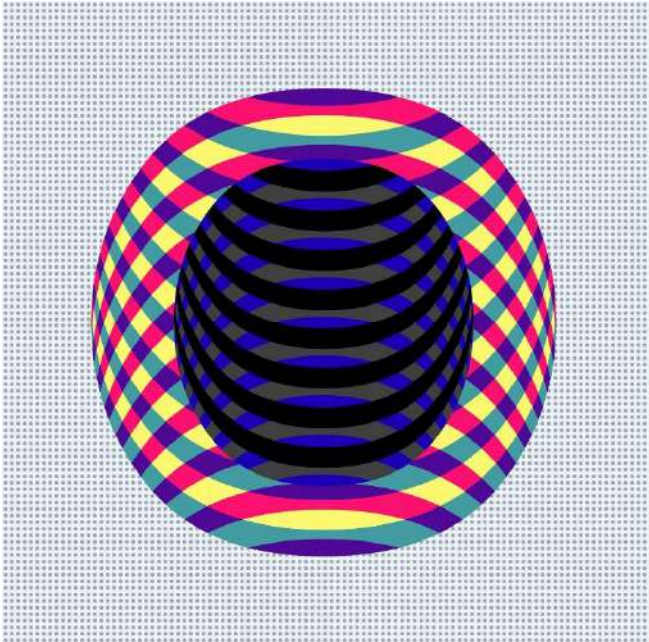


ブラスト・セオリー 《Can You See Me Now?》 2001年～



ブラスト・セオリー 《Can You See Me Now?》 2001年～

メインビジュアル

**Tokyo **o**daiba
triennale 2025**

| コンセプト |

東京お台場トリエンナーレの舞台であるお台場という土地を紐解くと、武器である砲台が、その役目を果たすことなくそのまま残された歴史があります。使われずに残された砲台の砲口を覗き込むと、それは砲口ではなく、未来へのタイムトンネルなのではないか？ “o”は砲口でありトンネルの入口である。そんなイメージが頭に浮かび、odaibaの“o”をロゴにしました。トンネルを抜けるとそこは別世界、という物語が古今東西描かれているように、トンネルの存在は現実世界と異世界をつなぐ象徴でもあります。この芸術祭は現在と未来、現実と非現実を繋ぎ、私たち（作家や鑑賞者）を行き来させる。アートは未来を創造し、創造は未来をつくる。これが、ロゴ及びメインビジュアルに込められた想いです。

| プロフィール |

KIGI (キギ)

植原亮輔と渡邊良重により発足。企業やブランドのアートディレクションのほか、プロダクトブランド「KIKOF」や、ほぼ日とのファッションブランド「CACUMA」、アイウェアブランド「TWOFACE」などのデザインコンテンツを手掛ける。東京・池尻でギャラリー&ショップ「OFS.TOKYO」を運営するなど、ジャンルに拘らず自在な発想と表現力でクリエイションの新しいあり方を探し、活動している。代官山ヒルサイドフォーラム「all is graphics」展（2022）、宇都宮美術館「KIGI WORK&FREE」展（2017）、東京 ADC 会員賞（2017、2019、2023）、東京 ADC グランプリ（2015）、亀倉雄策賞（11th 植原、19th 渡邊）等受賞。